

茶道の心

愛知県立横須賀高等学校1年（愛知県）

平川 雪華

『茶道は〇〇を豊かにする』。〇〇には何が入ると思うだろうか。人生、暮らし、感性……等々、考えればいくらでも思いつくだろう。多くの選択肢があるなかでも、私は迷わず「心」を代入する。

私は幼い頃から抹茶が好きだった。しかしなかなか機会に恵まれず、実際に稽古を受けることはないまま高校に入学。そして今年、待ちに待った茶道部への入部が実現した。茶道の稽古は思っていたよりも覚えることが多かったが、日々、自分の心が豊かになっていくのを感じる。今まで見過ごしていた道端の小さな花が気になったり、変わりゆく雲の様相を美しいと思ったようになるようになった。日常に転がっている数々のモノを「種」と表現するならば、感性はそれらを育てる「水」、目には見えねど確かに自分を支えてくれている経験は「空気」と言えるだろう。だが、「種」は「水」と「空気」だけでは芽吹かない。「適温」が必要不可欠である。それはまさしく、人間関係を指すのではないか。周囲の人々と健全かつ良好な人間関係を築けなければ、「種」は永遠に「種」のまま日常に埋もれていくだろう。「水」「空気」「適温」のすべてが揃ったとき、ただのモノであった「種」は芽吹き、心を彩る「花」が咲くのだ。

稽古中に気付いた。茶道は「種」の発芽条件をすべて含んでいるということに。和敬清寂や利休七則がそれを裏付けている。つまり、私が茶道を通して心が豊かになったと感じているのは、「種」が「花」へと着実に育っている証拠なのだ。私が思うに、茶人特有の上品でしたたかな雰囲気は、稽古によって育ちきった「花」が醸し出しているのだろう。その雰囲気は、どこか茶室のものと似ている。

私は毎度、茶室に入った瞬間そこがまるで別世界であるかのような感覚に陥る。そして、心が潤い豊かになっていくのだと感じる。それは、茶室の独特な香りや雰囲気が、ずっと心を包み込んでくれるからだ。日常の喧噪からは一時的に解放され、代わりに指先まで意識をめぐらすほどの繊細な注意が必要になる。このとき、自分と同じように緊張していたであろう遠い昔の人々へ思いを馳せるのが非常におもしろい。これが茶道の醍醐味だと言ってもおかしくないだろう。現代を生きながら昔の人々と心を通わせら（れた気にな）れるものは茶道以外にそうないと思う。

茶道歴1年目である私にとって、今年度の文化祭が初めてお点前を披露する場となる。今年度は一般公開が中止になったため、他校の友達や家族を招待することはできなくなった。残念だが、少しでも多くの人に茶道の魅力を感じてもらえるよう、心を込めてお点前するつもりだ。もし緊張して不安になったとしても、「花」を美しく咲かせるための試練と思えば大丈夫に違いない。これまでの稽古の成果を十分に発揮できるよう、全力を尽くそうと思う。もちろん、心のなかの静寂を保つことは忘れずに。